様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２５４８

研究課題名（和文）アメリカ南部文学の展開――ウィリアム・フォークナーからコーマック・マッカーシーへ

研究課題名（英文）The Development of the Literature of the American South: From William Faulkner to Cormac McCarthy

研究代表者
大地　真介（Ohchi, Shinsuke）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・教授

研究者番号：５０３３０６５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：今日アメリカでもっとも重要な小説家の一人であるコーマック・マッカーシーは、アメリカ文学の代表格であるノーベル賞受賞作家ウィリアム・フォークナーから多大な影響を受けており、両作家はアメリカ南部文学の双璧をなす。本研究は、マッカーシーによるフォークナーの技法やテーマの改変に着目することにより、アメリカ南部文学がどのように展開してきたかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在の日本にとって最も重要な国は、良くも悪くもアメリカであり、したがって、日本人はアメリカをより深く理解しなければならない。本研究は、そのアメリカの文化の研究である。ウィリアム・フォークナーとコーマック・マッカーシーが双璧を成すアメリカ南部文学の特質はもちろんのこと、同文学を生んだアメリカ南部の文化・社会・歴史の特質についても詳細に研究した。

研究成果の概要（英文）：Cormac McCarthy, one of the most important American novelists today, is greatly influenced by Nobel Prize-winning novelist William Faulkner, a representative of American literature, and they are the two greatest Southern writers. This study has shown how the literature of the American South has developed, by paying attention to McCarthy's modifications on Faulkner's techniques and themes.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学　アメリカ南部　ウィリアム・フォークナー　コーマック・マッカーシー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

アメリカの文学研究の重鎮 Harold Bloom は、現在のアメリカ文学を代表する小説としてトマス・ピンチョン、フィリップ・ロス、ドン・デリーロと共にコーマック・マッカーシーの作品を挙げており、近年マッカーシーはアメリカでノーベル賞に最も近い作家の一人とされている。しかしながら、６作目の長編小説 *All the Pretty Horses* の商業的な成功まではマッカーシーの処女作以外の作品のハードカバーはすべて絶版になっており、極度のインタビュー嫌いのせいもあって、彼が世間の注目を浴びたのは比較的最近のことである。したがって、マッカーシーについての研究書はまだ少なく、日本国内に至っては、論文は数えるほどしかなく、マッカーシーの名を冠する研究書は皆無の状態だった。

Erik Hage が指摘しているように、マッカーシーはウィリアム・フォークナーを代表とするアメリカ南部の作家たちが紡いできた南部ゴシックの流れをくむ作家であり、多くの作品で陰惨な南部を描く。*The Cambridge History of American Literature* では、フォークナーの影響を最も受けた南部作家はおそらくマッカーシーだとされており、実際、フォークナーと同じく南部で育ち成人してからも長年南部に居住したマッカーシーの作品とフォークナーの作品の類似点は数多く存在する。マッカーシーの作品の登場人物（プア・ホワイト、貧農、旧家の末裔）や出来事（近親相姦、殺人、南部貴族の若者の自虐的な悲しみ）はフォークナーの作品を彷彿させるし、また、Steven Frye も述べているように、文体においても、息の長い文章やイタリック体の多用、会話文における引用符の不使用などフォークナーの影響が容易に見て取れる。しかしながら、世界的に見てもフォークナーとマッカーシーの関係を中心に扱う論文は無いに等しく、研究書に至っては皆無である。マッカーシーを他の作家と比較する研究書としては、マッカーシーと同時代の作家との関係を論じるものが多く、それ以外では、フォークナー以外の南部作家との比較研究のみである。フォークナーとマッカーシーの名前を冠する研究書としては Alan Bourassa の *Deleuze and American Literature: Affect and Virtuality in Faulkner, Wharton, Ellison, and McCarthy* があるが、これはフォークナーとマッカーシーの比較研究ではない。なお、フォークナーの最大の後継者としてトニ・モリスンが挙げられることもあるが、モリスンのほとんどの作品の舞台は南部ではないのでモリスンは南部作家とはいいがたく、南部文学がどのように展開してきたかということについてモリスンを通じて考察することは難しい。やはり、フォークナーの最大の後継者とされる南部作家マッカーシーとフォークナーを比較研究することによって初めて、今日に至るまで南部文学がどのように展開してきたかを示すことができると考えられる。

筆者は、前回の科学研究費でフォークナーの作品の技法とテーマについて研究したが、その研究中に、フォークナーの後継者としてのマッカーシーの重要性を認識し、フォークナーの技法やテーマが、マッカーシーの代表作の一つ *Child of God* において、どのように継承・改変されているかを分析する論文を発表した。この研究より、今回の研究を着想した次第である。本研究では、それらの研究を発展させる形で、マッカーシーのその他の主要作品についても同様に論文を書いていった。

２．研究の目的

アメリカを代表する作家の一人である南部作家ウィリアム・フォークナーの最大の後継者とされる南部作家コーマック・マッカーシーは、今日のアメリカで最も重要な作家の一人と言われているが、上述したように、世間から注目されたのは比較的最近のことである。したがって、研究書も少なく、フォークナーとマッカーシーの関係についての研究に至ってはほとんどなされていない。本研究の目的は、マッカーシーがフォークナーの何を受け継ぎ、何を改変したかという点に着目することにより、両作家が双璧を成すアメリカ南部文学がどのように展開したかを明らかにすることである。そして、そのような作業を通じて、南部文学を生んだアメリカ南部の文化や社会の特質をあぶりだすことも研究目的の一つである。

先述したように、筆者は、既にマッカーシーの *Child of God* をフォークナーの作品と比較検証した論文を書いていたが、本研究では、その論文に基づき、マッカーシーのその他の主要作品において、フォークナーの技法やテーマがどのように受け継がれ、変容しているかということを詳細に見ていった。そうすることによって、両作家が双璧を成す南部文学がどのように展開したかを示すのが目的である。そして、そのような作業を通じて、南部文学の背景であるアメリカ南部の文化や社会の特質についても深く考察していった。なお、マッカーシーはテキサス州を作品の舞台とすることもあるが、同州は、西部の一部と言われることがあるものの、南北戦争の際に南部連合に加わっていたことと地理的位置関係から通常南部に分類され、実際、アメリカ合衆国国勢調査局の分類でもテキサスは南部に属している。

マッカーシーは近年最も頻繁に映画化の対象となっている作家の一人であり、アメリカだけでなく日本でも一般的に知名度が急上昇している。本研究は、社会一般の人たちに、マッカーシー、ひいてはアメリカの文学・文化・社会について深く理解してもらうことにつながると考えられる。

３．研究の方法

本研究の学術的な特色・独創的な点は、既述したようにフォークナーとマッカーシーを本格的に比較する研究が無いに等しい中、フォークナー作品とマッカーシーの主要作品を比較検証するという、国内はもとより世界的に見ても先駆的な研究であることである。筆者は、前回の科学研究費で取り組んだフォークナー研究を発展させる形で、フォークナー作品の技法とテーマがマッカーシーの主要作品でどのように継承・改変されているかということを分析し、両作家が双璧を成す南部文学がどのように展開したかということを分析するのが本研究の方法である。

まず、フォークナー、マッカーシー、アメリカ南部の文化・社会・歴史に関する最新の研究書を科学研究費で購入して読んでいった。また、フォークナーの原稿を多く所蔵するテキサス大学オースティン校、マッカーシーの原稿を有するテキサス州立大学サンマルコス校の図書館に行って資料収集をした。そして、マッカーシーの *Child of God* とフォークナー作品と比較検証する拙論を基にしてマッカーシーの他の代表作についての論文やフォークナーの論文を執筆し、本を出版したり、国内外の学会で発表したりした。

４．研究成果

（１）2017 年度

筆者は、まず 6 月に国際学会において英語で口頭発表をし、論文が同学会の学術雑誌に掲載された。これらの発表と論文によって、フォークナー文学の集大成とされる作品のテーマが人種・階級・ジェンダーの境界のゆらぎであることを明らかにした。

また、8 月にも国際学会で英語の口頭発表を行った。本発表では、上述のフォークナーの人種・階級・ジェンダーの境界のゆらぎのテーマが、今日世界を代表するような映画にも影響を及ぼしていることを指摘した。

9 月に筆者は、『フォークナーのヨクナパトーファ小説――人種・階級・ジェンダーの境界のゆらぎ』という単著の研究書を彩流社から出版した。拙著は、アメリカ学会、日本アメリカ文学会、日本ウィリアム・フォークナー協会、日本英文学会等の主要学会で書評の対象となり、好評であった。拙著では、フォークナーの代表作に共通するテーマが人種・階級・ジェンダーの境界のゆらぎであり、マッカーシーはそのテーマを単に引き継ぐだけでなく巧みに発展させていることを詳細に論じた。

2018 年 3 月には、『英語英文学研究』（査読あり）で英語論文を発表した。本論文では、フォークナーの代表的な短編小説のテーマも、やはり人種・階級・ジェンダーの境界のゆらぎであることを指摘した次第である。

（２）2018 年度

まず、8 月に龍谷大学で開催された関西フォークナー研究会において招聘講演を行った。講演題目は、「アメリカ南部文学の展開――ウィリアム・フォークナーからコーマック・マッカーシーへ」であり、マッカーシーの代表作 *Blood Meridian or The Evening Redness in the West* とフォークナーの作品を比較検証することにより、アメリカ南部文学がどのように展開しているかを講じた。

9 月には、共著『フォークナー文学の水脈』を彩流社から出版した。同書で筆者は、「アメリカ南部の〈国境〉のゆらぎ――『サンクチュアリ』とコーマック・マッカーシーの『老人の住む国にあらず』」というタイトルの論文を発表した次第である。マッカーシーは、作家活動の中期以降はフォークナーからの影響を脱しているというのが定説となっているが、同論文において、特にマッカーシーの後期作品『老人の住む国にあらず』を取り上げてその定説を覆した。

12 月には、フォークナー作品の原稿等を多数所蔵するテュレーン大学とテキサス大学オースティン校の図書館、また、マッカーシー作品の原稿の大半を所蔵するテキサス州立大学サンマルコス校の図書館に行き、貴重な資料を収集した。

（３）2019 年度

8 月にはイギリスのオックスフォード大学で開催された学会において、"The Development of the Literature of the American South: From William Faulkner to Cormac McCarthy"というタイトルで、フォークナーとマッカーシーを比較検証する口頭発表をした。

10 月には諏訪部浩一東京大学准教授の編集による『フォークナーと日本文学』が松柏社から出版されたが、同書に収められた拙論において、フォークナーと横溝正史を比較することによって日本とアメリカ南部に共通する特質をあぶりだした。

また、同月、フィリップ・K・ディックの作品における人種問題を分析した拙論（フォークナーにも言及）を掲載した、杉野健太郎信州大学教授、諏訪部浩一氏、山口和彦上智大学教授および筆者で共同編集した『アメリカ文学と映画』を三修社から出版した。

（４）2020 年度

2021 年 3 月に出版された竹内理矢明治大学准教授編集の『深まりゆくアメリカ文学――源流と展開』において、筆者はコーマック・マッカーシーの解説を担当した。

本年度は新型コロナウイルスのパンデミックのため、論文発表を予定していた 6 月の国際学会がきちんと開催されなかった。また、筆者が司会者と世話人を務める、フォークナー、マッカーシー、コールドウェルの作品におけるプア・ホワイト表象についてのシンポジウムが 9 月の日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会で開催される予定だったが、これもコロナのため中止となった。ただし、拙論を含む同シンポジウムの内容は、2021 年 4 月に出版された同協会の学術雑誌『フォークナー』に掲載された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 大地真介	４．巻 23
２．論文標題 今世につながる格差社会の悲劇――フォークナーの「ウォッシュ」、「納屋を焼く」、スノープス三部作におけるプア・ホワイト	５．発行年 2021年
３．雑誌名 フォークナー	６．最初と最後の頁 57-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大地真介	４．巻 7.2
２．論文標題 Unsettling of the Boundaries of Race, Class, and Gender in William Faulkner's Go Down, Moses	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Humanities and Social Sciences Review	６．最初と最後の頁 475-479
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大地真介	４．巻 62
２．論文標題 William Faulkner's "A Rose for Emily" and Margaret Mitchell's Gone with the Wind: The Heroine's Obsession with the Old South	５．発行年 2018年
３．雑誌名 英語英文学研究	６．最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 大地真介
２．発表標題 The Development of the Literature of the American South: From William Faulkner to Cormac McCarthy
３．学会等名 10th Academic International Conference on Social Sciences and Humanities（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大地真介
２．発表標題 アメリカ南部文学の展開――ウィリアム・フォークナーからコーマック・マッカーシーへ
３．学会等名 関西フォークナー研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大地真介
２．発表標題 The Unsettling of the Boundaries of Race, Class, and Gender in William Faulkner's Go Down, Moses
３．学会等名 The 17th International Conference for Academic Disciplines（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 大地真介
２．発表標題 Alejandro Gonzalez Inarritu's The Revenant and William Faulkner's "The Bear"
３．学会等名 The 10th Screenwriting Research Network International Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

１．著者名 諏訪部 浩一編・大地真介他著	４．発行年 2019年
２．出版社 松柏社	５．総ページ数 448
３．書名 フォークナーと日本文学	

1．著者名 杉野 健太郎・諏訪部 浩一・山口 和彦・大地真介編著	4．発行年 2019年
2．出版社 三修社	5．総ページ数 360
3．書名 アメリカ文学と映画	

1．著者名 竹内理矢他編・大地真介他著	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 256
3．書名 深まりゆくアメリカ文学――源流と展開	

1．著者名 花岡秀他編、大地真介他著	4．発行年 2018年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 367
3．書名 フォークナー文学の水脈	

1．著者名 大地真介	4．発行年 2017年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 236
3．書名 ウィリアム・フォークナーのヨクナパトーファ小説――人種・階級・ジェンダーの境界のゆらぎ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関